

声楽の発声について

－理論と実技指導の実際－

Vocal music about vocalization

-Practice of theory and practical training-

大橋 ジュン
(教育学科講師)

黒田 恵 美
(教育学科講師)

八木 寿 子
(教育学科講師)

篠部 信 宏
(教育学科講師)

ガハプカ 奈 美
(教育学科教授)

抄録 コロナ禍において「声楽」を取り巻く環境は大きく変化を迫られた。飛沫による感染防止のために政府によっても現場での飛沫のある活動のあり方に関して厳しい制限が発表され、「声楽」の授業は困難を極めた。そのような中、われわれは様々な工夫を凝らす中で多少の混乱や困難は感じたものの声楽の理論と実技の学修効果を落とすことなく授業提供してきた。対面ありきで行ってきた科目の一つであったが、オンデマンド課題やオンライン双方向型授業を駆使することで一定の評価ができる「声楽」の授業の可能性があることが示唆された。

キーワード：声楽、声楽理論、声楽実技、オンラインレッスン

1. はじめに

「声楽」を取り巻く環境は、コロナ感染症によって大きく変わった。

政府によって学校教育の現場での「歌唱」、「合唱」、「リコーダー演奏」、「合奏」他、飛沫のある活動に厳しい制限がかかりⁱ、具体的に指示があった。①マスクは飛沫防止の効果があるため、原則、着用すること②合唱している児童生徒同士の間隔は、前後方向および左右方向ともに出来る限り2m（最低1m）空ける③立っている児童生徒の飛沫が座っている児童生徒の顔へ付着するリスクを避けるため、立っている児童生徒と座っている児童生徒が混在しない様にする④連続した練習時間を取らず、常時換気は原則として、十分に換気を行うこと、また近距離での大声は避けるなど非常に具体的である。

加えて、各教科に共通する活動である、「グループワーク」および「近距離で一斉に大きな声で話す活動」や、理科における「児童生徒同士が近距離で活動する実験や観察」など非常に多くの科目に関して具体的な指示がなされた。

このような事態は、当然誰もが初めて経験することであり、学校教育の現場は混乱し、困難を極めた。そのような中、合唱団でのクラスター等全国で起き始め、合唱連盟が「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」ⁱⁱを発行し、「飛沫を伴う活動の危険性」を感じる異例の事態となった。

そのような動きは、大学での講義活動においても大きな影響を受けた。特に飛沫の伴う「声楽」はその行為そのものが飛沫を避けられないものであり、これまでの教授行為において考え

ると、近距離で姿勢について教示したり、口の開け方を近距離で示したりしてきたことを考えると、大学での学びのための「声楽」はいかにあるべきかを検討しながら少しずつではあるが前進してきた。

本稿では、コロナ禍以前とコロナ禍、そして現在の「声楽」の授業内容を詳しく示した上で、その時々に行ってきた声楽の理論と実技指導の大学での工夫について具体的に述べ、その中でどのような効果が得られたかについて述べていく。

本論文の目的は、歌唱能力を上げるためには現状をより良く理解すること。これこそが過去を知り、深く研究をする最大の目的である。という考えの基に綿密な歌唱指導ひいては音楽教育の場で学生たちがより良い音楽の世界を知り得るために真の芸術的創造性を育む機会となるⁱⁱⁱ (ガハプカ, 2014) と述べるように、コロナ以前と現状の声楽のあり方を比較研究し、理論に基づいた実技指導について明確化することにより、より良い歌唱指導を目指すことにある。

2. 「声楽」の授業について

本学で「声楽」を学ぶことのできる科目は、次のように4回生後期まで8つの授業が用意されている。そのうち本稿で取り扱う科目は、1回生前期から2回生後期で開講される、

表1 音楽教育学専攻の「声楽」の授業一覧

回生・期	科目名	概要
1回生・前期 必修	声楽1	入学して初めての学生も相当数いる授業である。音楽教育学専攻卒業必修科目及び教職免許状(中学校・高等学校音楽科教諭)必修科目である。
1回生・後期 選択	声楽2	「声楽1」に引き続き後期開講される授業である。「様々な指導法を学ぶ」という観点から「声楽1」で教わった教員とは別のクラスに配属するように工夫をしている。
2回生・前期 選択	声楽3	「声楽2」に引き続き開講される授業である。個人レッスンによって多言語による歌唱を学び音楽表現をさらに深めていく。
2回生・後期 選択	声楽4	「声楽3」に引き続き後期開講される授業である。学生の進度に合わせてドイツ語、フランス語の歌唱やオペラ・アリア等へジャンルを広げ、表現することを学ぶ。

3回生・前期 選択	音楽実技 A1	3回生前期に開講される。ゼミで声楽を選択した学生以外が履修することができ、歌曲やオペラ・アリア、ミュージカルナンバーなど、多岐に渡るジャンルを学ぶ。
3回生・後期 選択	音楽実技 A2	3回生後期での授業で有り、これまで進めてきた声楽レッスンの中で各自が更に深く追求したい分野の物を選択し、個人レッスンでより良い表現を目指す。
4回生・前期 選択	音楽実技 A3	本授業は4回生前期で行われることから、授業開始前に履修生全員と面談を行い、必要な内容を明確にした上で授業内容を確定している。教員採用試験が近くなれば、「弾き歌い」の授業も行い、視唱の試験がある場合は視唱の歌い方の指導なども出来るように柔軟な対応をしている。
4回生・後期 選択	音楽実技 A4	「音楽実技A3」とほぼ同様であるが、後期開講であるため、就職先(幼稚園・小学校・中学校・高等学校・一般企業-ミュージックスクールも含む)や進学に合わせて様々な楽曲を歌唱したり、弾き歌いをしたりしている。

「声楽1」から「声楽4」とする。

このように4年間通じて「声楽」を学ぶ機会には用意されているものの、全学生が履修するのは「声楽1」のみである。そのため、コロナ禍であってもこの「声楽1」という授業で今後声楽を学ぶにあたって必要である知識と実践する力をつけなければならなかったため、コロナ禍では、対面が出来ない期間は理論に関しては、すべてオンデマンド資料を使用することで、履修生全員が同時に同じことを学び、身につけることを目指した。

声楽の理論は実践を伴っている場合も多くあるため、その場合は、YouTube限定公開で説明している動画をアップしたり、動画レッスンや、双方向型でのネット授業(zoom等)を通してつないだりして、対面せずに発声や発音指導をするなどすることで何とか最低限の事は伝えることが出来た。また、鍵盤楽器の類が自宅にない学生には、ロールアップピアノを貸し出すなどした。加えてピアノ演奏自体が不得手な学生に対しては、声楽教員自らが伴奏を収録し、学生へ送ることで伴奏との関係性を感覚的に示唆することが出来た。

学生らは教員へ動画を送付する前に自分の演奏を何度もチェックすることから、自ずと客観的に自分の演奏を見、聴くことにより、対面でレッスンをする以上に演奏の精度が上がった面もあった。この点においては一定の評価がなされる点である。一方、これまで「声楽」を習ったことがある学生ならば、ある程度歌唱する前にどのようなウォーミングアップをすべきかわかるが、大学になって初めて声楽を学ぶというような学生にとっては、何をどのようにすれば良いのかわからぬままに半年が過ぎ去ってしまった様子も見受けられた。このような事態を避けるべく、オンデマンド教材として①ストレッチの方法②発声方法③伴奏つき教材（コンコーネ 50 番練習曲より）の動画を挙げることで緩和しようとした。

昨年度においては、対面と YouTube、双方向型でのネット授業（zoom 等）すべて使用できることで、履修生の感覚に合わせた対応をすることが出来た。

3. ヴォイストレーニングについて

まずここからは、「声楽 1」必修科目でのコロナ禍での授業進行と工夫、そして問題点について述べていく。

声楽を学ぶにあたって楽器である体、特に発声器官を知ることは必要不可欠である。楽器を自由に使えるようになってこそ、どのように表現するかを演奏という形で実現できるのである。また、楽器の個性差が大きいのは声楽の特徴と言える。

スポーツの世界ではトレーナーが存在し、その多くは柔道整復師、鍼灸師、理学療法士のように医療系の国家資格を持つ人材であり、選手がより安全に効率よくパフォーマンスが出来るようサポートがなされている。同じように体を使う声楽家の教育現場では、音声生理学という座学に軽く触れるだけで、実技指導においてはあまり連携が取れておらず、「お腹から声を出さない」「声を額に響かせて」「お腹で支えて」といったイメージワードでの指導が当たり前のように行われているが、果たして、本当にお腹

から声は出るか、声が響くのは額なのだろうか、また、お腹で支えるとは一体どのようにすることなのかと考えこんでしまう事も多いのではないだろうか。

多くの声楽家は、声のトラブルに見舞われた時、駆け込んだ音声クリニックで内視鏡が映す自分の楽器（声帯）と初めて向き合うことになる。そこでいかに声帯を酷使していたかを知り、労わるようになるのは正に不幸中の幸いである。このようになる前に、人体を平面図ではなく 3D で見られるようになった現在、声楽の授業も機能解剖学を用いた指導がなされても良いのではないだろうか。もちろん、歌を歌うことは良い発声をするだけではなく、作曲家が伝えたい音楽をいかに表現するか、詩人が選び抜いた言葉をいかに伝えるかが大切であり、その為に私たちは様々なことを同時進行で学ぶ必要がある。

昨今、高等学校での音楽授業は選択授業となり、音楽の授業を受けずに音楽教育専攻に入学する学生も多い。「声楽 1」では楽器の使い方は勿論のこと、一人でいわゆる声楽で歌われるような歌を歌う機会のないまま、いきなりこれまで経験したことのないような楽曲に取り組むということになる。それを回避すべく「声楽 1」では隔週でヴォイストレーニングの授業を楽曲のレッスンと並行して行い、より円滑に授業を進めていく方針を執っている。このようなヴォイストレーニングの授業の必要性を先に述べておきたい。

この授業では機能解剖学的視点から歌う時の姿勢に始まり、声楽で最も重要な発声器官や呼吸器の仕組みを理解することから始める。お腹から声が出るのではなく、声は声帯の振動であることや、声は額に響くのではなく 3 つの共鳴腔が存在することなど、実際に体をどのように使っているかをより正確に捉え、発声法、呼吸法を学び実践する。さらにコールユーブンゲンやコンコーネ 50 番練習曲といった教本を使い、発声法を活かした歌唱、そして音程、リズム、ハーモニーといった音楽に必要な要素、いわゆるソルフージュの能力を高めるトレーニング

している。また、楽曲の取り組みの中での疑問や支障が生じた時は、個別に質問を受け対処することにより、前述のような楽器の個体差に対し、個々の指導に努めている。このようにヴォイストレーニングと個人レッスンを交互に行うことで基礎を全く知らない学生が安心して楽曲に取り組みよう授業を進めてきた。しかし、そんな中、新型コロナウイルスの流行によってこれまで経験したことのない対応を迫られた。

本来対面で行うのが当たり前であると思っていた実技授業が一切不可能となり、対面授業が出来ない中、何が出来るのかと戸惑った。なんとか授業を始めようと、発声についての資料や動画教材として、発声前のストレッチや、教本の伴奏を録画しポータルで共有することにより、それぞれの家で実技を行うことになったが、そこでまた新たな問題が発生した。学生が歌える環境にないことや、音を確認するためのピアノなどの楽器が無い学生への対応である。コロナ禍で学校が閉鎖し練習室が使えないという現実には、実技を学ぶ学生にとって非常に辛いことである。ネット環境を含む学生の生活環境に依る対応が問われ、また、初めての大学生活がコロナ禍にある不安を解消するための臨機応変さが必要となった。金管楽器奏者がカラオケルームで練習するのを耳にしたことがあるが、それもコロナ禍では店が閉まっている為不可能であった。コロナ禍で様々な産業が打撃を受ける中、破格値のレンタカーを借りて楽器を練習していたという学生のアイデアに感心し、その思考の柔軟性を教員も見倣う余地があると実感した。

皆が試行錯誤する中、活躍したのがオンデマンド型動画配信や双方向型オンライン授業である。座学であれば代用可能であるが、音楽に関しては様々な不具合がある。決定的な問題は音質と時差である。音楽はそもそも空間にいかにか音を振動させるかを追求するものであり、アンサンブルとなれば、その空間を共演者と共有するのが目的である為、オンラインでは非常に困難である。音質に関しては zoom、LINE や FaceTime などの双方向型オンラインを試した

が、音が途切れることがしばしばあり、また、音の高低によってもマイク拾いの良し悪しが顕著であった。そして、一番厄介であったのは音が届く時差である。教員のピアノ伴奏で学生が歌うという本来のレッスンは不可能に等しい為、授業での双方向型オンライン使用には足踏みした。

一方的な課題では学生の学びが把握できない為、課題に対し如何に学んだかを「振り返りシート」としてレポートを提出してもらった。歌う前のトレーニング、腹式呼吸が実践出来たか、また、コールユーブンゲン、コンコーネ 50 番練習曲の課題をいかに取り組んだか、反省点や今後の改善点を文章でより明確にし、受け身の授業ではなく自分自身で解決策を模索することを学生に促せたのはコロナ禍での成果である。また、そのレポートに対して 1 人ずつコメントを返すことにより、実技を独りで学ぶ不安を回避する工夫となった。文章での実技指導は、指摘したい体の部位や、どの程度などを的確に示し伝えることが重要であり、今まで対面授業でいかにジェスチャーやイメージワードの曖昧な表現で伝えていたかを見直す結果ともなった。しかし、改めて実技指導を文章で指導するには限界があり、また多くの時間を費やすため教員の負担になったのも事実である。

次に双方向型オンライン授業ではどのような実技指導が可能かを述べたい。冒頭でも述べたようにアンサンブルは残念ながら不可能であるが、リズムや音程を学ぶコールユーブンゲンなら可能であった。Zoom を使い 1 人ずつの歌唱に対しての指摘を全員が聴講する形で、本来の対面授業とかなり近いものとなった。顔の表情を見ながら、画面越しではあるが実際の声を聴けることや、すぐに指摘が出来ることの重要性を改めて感じた。画面の共有を使えば、資料や動画を一緒に見ることができ、悲観的だったオンラインでの学びに対し可能性を感じた。ハーモニーの学びについては、コンコーネを教員側が弾き歌いをしてしながら、前もって音程、リズム、伴奏との兼ね合い、調性の変化などの注意点を指摘することによって円滑な練習法を示すこと

ができた。オンラインで参加出来なかった学生への対応としては、演奏した動画や録音を送ってもらい、その音源を流しながらコメントした動画を返信するという、双方向型オンデマンドという工夫もしてみた。学生自身が客観的に自分の演奏を聞きながら、それに対する指摘を同時に聞くという新たな試みであったが、録音や録画機能を使っての学びにも可能性を感じた。音楽は体が楽器であり、尚且つ、空気伝導と骨伝導で自分の声を聞くため、実際に自分の演奏を聞くのは他の楽器よりはるかに難しい。録音や録画で自身の演奏を判断するには危険も伴うが、あらゆる媒体で録音でき、音質もかなり改善された今、学びの一つの手段として加えることを提案する。

双方型オンデマンド授業については、学生からは、自分の好きな時間に見ることができ、もう一度見直しができるというポジティブな意見もあった。

このコロナ禍で、筆者らは自分自身も受講者として機能解剖学の双方型オンライン講座などに参加し、自分自身の学びのためであると同時に、双方型オンライン授業のあり方についての参考となるような内容を持ち寄ったりしながら、授業のあり方の模索を繰り返した。

そこでの工夫についてまず、zoomを使用している双方型オンライン授業の中で、マイクやビデオのオンオフについて実感したことを述べる。マイクに関してはオフにすることで教員側の音声が見えなくなる利点があり、ホストである教員が全ての学生に対しマイクをオフ設定し、必要に応じてオンにして発言する手法を多くの教員がとってきただろう。しかしビデオに関しては少し複雑であり双方に利点欠点がある。まず、ビデオをオンにすると学生の授業への参加意識が高まり、適度な緊張感が持て、教員側も学生の表情が見えコミュニケーションがとりやすく、それに応じた授業の進め方ができる。一方、ビデオをオフにすると、その授業への参加意識は弱くなり、教員との間に溝ができる。同居する家族へ配慮や自身の身だしなみへの気遣いが不要となる利点があるが、それはバー

チャル背景を設定する工夫ができるため、授業へ気持ちを切替えるためにもビデオはオンにすることが望ましいと筆者らは考えた。

オンデマンド型では、授業への参加意識は学生側に委ねられ、いつ視聴するかを自分で決められるが、複数のオンデマンド動画になると視聴が億劫になり、飛ばしながら視聴してしまうこともしばしばあるだろう。例えば筆者の受講した双方型オンライン講座を例に挙げるならば、終了後に不参加者や見直しのためのアーカイブ録画が送られてくるが、理解が不十分な箇所や、聞き逃した箇所を繰り返し学習できるという利点を感じた。オンライン型、オンデマンド型、ビデオのオンオフは、その授業の内容、人数によって、その利点欠点がある為、教員側がそれを踏まえた上で使い分ける必要性を感じたが、学生側の学びに対する本人の意志に任される部分も大きいのではないかと思われる。

次に、コロナ禍2年目での授業対応について述べていく。

コロナに関しての知識も少し出来てきた2年目であるため、ヴォイストレーニングもマスクをしたままの対面授業になったが、合唱やヴォイストレーニングの複数人の授業では、距離をとり授業の途中で換気をするなどの工夫がなされた。対面授業になったとは言え、マスクをしたままの口元が見えない状態でのヴォイストレーニングの授業は、コロナ禍以前には考えられない状況であった。果たしてマスクをしたままのトレーニングが本当に可能であるのか些か不安ではあったが、収束の見えないコロナ禍では対面で授業が出来ることを前向きに捉え、今までの実技授業たるものの固定観念を捨てる必要があった。イメージワードやジェスチャーではなく、的確な言葉を用いて、いかに歌うことに必要な呼吸器官や発声について論理的に伝えられるかが問われた。そこでは、筆者が受講した機能解剖学の講座での知識は大いに役立った。声が音としていかに振動するかを、声帯の仕組み、呼吸器官と横隔膜などの筋肉の関係、共鳴腔など、今までは実技中心であり触れられなかった楽器としての体のことを座学で学

び、その後、実技指導へ導けたのはコロナ禍で模索する中で有意義な授業となった。対面授業になり同じ空間を共有することの有り難さを感じたが、オンラインでのように口元が確認できないのは、コロナ禍での対面授業の困難な点である。マスク内で発せられた声から、実際生徒がどのような口の開け方をしているか察することも必要となった。一方、オンラインでは不可能であった伴奏付きの教本であるコンコーネ 50 番を扱うことができ、対面では和声感を養うトレーニングができたのは有り難いことである。このように本来対面授業である実技の授業はコロナ禍において様々な形態でなされたが、その利点欠点を比較してみると表 2 のようになる。

表 2 にあるように、いずれの授業形態をとっても利点も欠点もあるが、コロナ禍における授

業の多様性への模索は、今後の声楽の実技指導において対面授業以外の可能性につながるのではないと思われる。また、授業を止むを得ない理由で休む学生への対応や、この先懸念される気候変動や天災時においても臨機応変に対処に備えるための示唆を得た。

コロナ禍 2 年目になると、マスク着用の歌唱に教員も学生も慣れて前向きに授業に取り組んでいるが、声楽の学びがほとんどコロナ禍で行われた学生たちが、将来、教員側の立場になった時に困惑しないよう、いずれの授業形態にせよ、マスクを外した時のことを念頭に置きながら授業する必要がある。

4. 声楽について

ここでは「声楽」について 3. ヴォイストレーニングについて同様、コロナ禍以前とコロナ禍

表 2 コロナ禍におけるヴォイストレーニング授業の授業形態による比較

授業形態	利点	欠点
オンデマンド型	<ul style="list-style-type: none"> 好きな時間に場所を選ぶことなく見ることができる。 聞き逃したところを反復して見直すことができる。 マスクを外しての歌唱ができるため、発声や滑舌を示しながら指導ができる。 ある程度の音質が維持できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業への参加意識が薄い。 いつでも視聴可能なため複数の授業動画をためてしまう危険性。 動画を飛ばしながら見てしまう。 リアルタイムでの質問や指導ができない。
双方向型オンデマンド	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の歌唱動画に対し動画で返すことにより、より対面に近い実技指導ができる。 学生から送られてきた歌唱動画や音声を流しながら指導している動画を送る、という方法は、生徒自身も自分の歌を客観的に聴くことができ、より効果的である。 弾き歌いや音源を利用して伴奏付きの歌唱のやり取りができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 声質によってマイク拾いの良い声、悪い声がある。 伴奏音源を利用した場合、あくまでもカラオケでありアンサンブルにはならない。 学生一人一人への動画配信は教員側の負担が大きい。
双方向オンライン型	<ul style="list-style-type: none"> ビデオをオンにすることで対面授業により近く、参加意識を持って授業を受けられる。 リアルタイムで質問や指導ができる。 マスクを外しての歌唱ができるため、口の開け方や表情筋の指導ができる。 音声は双方のネット環境によるが音程やある程度の発声は確認できる 共有画面を使い、資料や動画の共有ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 音質が悪く、双方のネット環境によって音が途切れることがある。 ネット環境と歌える環境を同時に作るのが難しい。(大学の練習室が使用後は問題解消) 伴奏で歌うといったアンサンブルは不可能。
対面型(マスク着用)	<ul style="list-style-type: none"> 歌える環境で授業を受けられる。 リアルタイムで質問や指導ができる。 同じ空間を共有でき、ピアノ伴奏とオンタイムで歌えるため、アンサンブルができる 	<ul style="list-style-type: none"> 歌える環境にはあるがマスク着用の歌唱である。 マスクで口元が見えないため、口の開け方や表情筋の指導が難しい

から現在まで実際に行っているレッスン内容について述べていきたい。

コロナ禍以前の2019年度までは各クラス3名から5名の学生でグループレッスンを行っていた。学生はそれぞれおよそ20～30分の個人レッスンを受け、他の学生のレッスンを聴講する。細かな内容は指導者によって異なるが、「声楽1」および「声楽2」の授業では、筆者の場合、最初に音階による発声練習をすることで歌うための身体の準備をし、次に発声の教則本「コンコーネ50番」で発声の基礎練習と同時に伴奏との関わりを自身の耳を使ってしっかりと聴けるようにした後、外国語の歌曲やオペラ・アリア、日本歌曲などを実際に歌唱しながら発声や発音について、更に音楽的要素などについて細かく指導するという流れで行っていた。

授業中に歌唱する楽曲に関しては、学生の進度や声質に適した課題曲を選曲するが、各学生にはできる限り違った曲を選び、多くの曲に触れる機会を作るようにしている。理由としては、実際に歌わなくても聴講により曲を知り、自分が歌唱する楽曲だけでなく、他に気になる楽曲があれば自発的に楽譜を探したり、実際に口ずさんでみたりして、学びを深められるからである。他にもグループレッスンの利点としては、数人とは言え、常に人前で歌うことによって、人前で歌うことに自然に慣れるということがある。これは歌うことだけでなく、将来教壇に立つ可能性が高い学生たちにとって、物おじせず何かを発信することにも役立つと考えられる。また他者のレッスンを見ることで問題点を自分に置き換えて考え、受講者の変化を分析すると同時に声楽や歌の指導をするときの指導用語を自然に学ぶことができるなどの様々な気付きがある。

2回生前期および2回生後期には、「声楽3」および「声楽4」の授業が用意されており、ここでは「声楽1」および「声楽2」で学んできた知識を活かし、聴講者が受講者の演奏を聴いた感想や、「今の歌唱について貴女ならどのようにレッスンをするか。」との質問に答えてもらったりすることで、学生が何を大切に思っ

て練習をしているかを知ることができた。

ところが2020年前期、コロナ禍により長年続けてきた対面でのグループレッスンはできなくなった。そこで「声楽1」では、ほとんどの学生が初めて声楽のレッスンを受けることとなることを想定して、第1回から第3回までの課題としてオンデマンドで①歌うための身体をつくるためのストレッチの方法②声を出す姿勢や発声方法③伴奏つき教材（コンコーネ50番練習曲より）の動画④イタリア語の発音を挙げたものを準備し、それを学生が各自自習出来るようにした。我々教員はそれに対する補足や質問の応答などを授業時間にZoomで行った。

第4回目からは学生が歌唱している様子を動画収録し、それに対し教員は同様に動画でのフィードバックを行った。学生が収録する楽曲は、コンコーネ50番練習曲から現在学んでいる1曲を自分で弾き歌いしながら歌唱するか無伴奏で歌唱のみ収録するか、あるいは無料でインターネットに出ている伴奏カラオケを流しながら歌唱するか等自身で選択の上、収録に臨んだ。また、楽曲については、特にイタリア歌曲はイタリア語が読めない学生も居るため、最初から歌詞を付けて歌唱するのではなく、階名唱をしている様子を送ることから始め、少しずつ歌詞を付けて歌えるように段階を経た動画でのレッスンを行った。

フィードバックの教員側の共通認識としては以下の通りであった。

- ・平等性が保てなくなるので、オンラインでのレッスンはしない。但し発音の指導はしてもよい。
- ・学生の中には、自宅で音出しが出来ない者、家に楽器がない者がいる為、音源や録音が提出できない場合がある。その場合、「歌詞の読み方」「歌詞の解釈」「作曲家について」など何かしら調べてデータで提出させる。
- ・学生から課題（録音や録画、あるいは教員からの課題）が送られてきたら、その日のうちに必ずフィードバックをし、決して日を跨がない。

などというものであった。対面授業が出来な

い中で、表2で述べたように動画でのやり取りは、口の形を見ることができ、実際に教員が歌っている声を学生は聴くことができるという利点も多かった。特に発音に関してはオンラインでは、マイクを通してのお互いの発音が聞き取りやすく、また口の開け方や形、舌の位置についてもカメラを通して、対面レッスンの時よりも近距離で示すことが出来、双方にとって対面レッスン時よりも効果的であった。また主に2回生が履修する「声楽3」では、1回の録画提出時間は20分程度までとされていたため、履修生の中には毎週コンコーネ50番に加えて楽曲3～4曲を提出する者もあり、コロナ禍以前よりも多くの楽曲に取り組み、学ぶことができた者もいた。しかし、動画でのやり取りが出来ない学生も居る中で授業としての平等性を保つことや授業時間内での収録などが終わらず学生、教員への過度な負担になったことは否めない。また、後期の授業で対面レッスンが始まってから知ることとなったのだが、録画のみで接していた学生の生の演奏を始めて聴き、マスクとレッスン用パーテーションを挟んでの歌唱ではあるが、録画の時の発声とボリュームなど印象の異なる点があり、機器を通すことはマイク通りの良い声と悪い声があることを思い知らされた。この点を録音されたものやオンラインでの演奏から判断することは困難であるが、今後また録音やオンラインでのレッスンを強いられることがあれば、細心の注意を払いたい。

筆者のクラスは全員音出しが可能でありWi-Fi環境も整っていたため、共通認識を踏まえた上で授業日前日までに録画を提出させ、その日のうちに動画ではなくメールでコメントを送ることとした。そして翌日の授業時間には筆者の自宅環境の都合により、学生の同意の下LINEのビデオ通話で筆者が実際に歌ってみせたりしながら、前日に送ったコメントの解説をしたり練習方法を伝えた。また歌詞の朗読をしてもらったり、発音練習をしたりもした。学生に歌わせることはできなかったが、その場で学生の疑問に答えられ、発音はその場で指導することが出来たので、対面レッスンに近い形で

うことができ効率が良かった。他の教員もそれぞれが工夫してフィードバックを行った。ある教員は学生の録画や録音を再生、巻き戻して何度か再生を繰り返しながら問題点を指摘し、その改善策を提示したものを録画し、YouTube限定公開で送り返していた。この方法は自身が自身の演奏や姿勢などを客観的に見ることもでき、何度も見直せることもできるという点で有効な手段であったと思われる。またメールで細かくコメントし、質問なども納得のいくまでメールでやり取りしていた教員もいた。いずれの方法も体のことや歌唱時の様々なタイミングを言葉のみで的確に伝える方法を改めて考える良い機会となった。様々なタイミングとは、言うまでもないが歌には歌詞がある。そしてメロディにも言葉にもそれぞれにリズムがあり、このお互いのリズムを壊さないように接点を見つけて、メロディに詩を乗せて語るように歌うのが理想である。また、どのタイミングでどのような感情の息を吸うか、どのようなタイミングで子音を発音するか、次の音の準備やイメージをするかによって、声の響き方や音楽表現は全く異なるものとなる。これらの微妙なタイミングをコロナ禍以前のレッスンでは、教員が伴奏を弾きながらピアノ伴奏で誘導しながら指導できたが、遠隔でのレッスンでは不可能となった。筆者のクラスの録画提出では、無伴奏で所々ピアノを弾きながら歌唱していた者、無料でインターネットに出ている伴奏カラオケを流しながら歌唱していた者、完全に無伴奏で歌唱していた者の3パターンいたが、いずれの場合も音楽の流れは悪く、伴奏カラオケに合わせて歌っていた者はタイミングを伴奏に合わせる歌い方になっており、不必要な間ができて発声においても音楽表現においても難しさを感じた。

2020年後期になり対面でのレッスンが可能となったが、感染症対策として密を避けるために、大学内で行うクラス数を半分にするよう、全体を2つのグループに分け、対面での個人レッスンの週と課題を提出する週を毎週入れ替えて行うこととした。また対面レッスンでは、教員はマスクとフェイスシールドの両方を着

用、学生はマスク着用の上レッスン用パーテーションの後ろでの歌唱とし、各学生の入替わり時には、パーテーションと譜面台の消毒と換気を行うこととした。表1で述べたように、例年であれば「声楽1」と「声楽2」では様々な教員の指導の仕方に触れるためにクラス替えを行うが、一度も直接の対面レッスンを行っていないとの理由により、クラス替えを行わず引き続き同じクラスでの授業とした。

待ち望んだ対面でのレッスンは叶ったが、先にも述べた通りマスクでの歌唱は、マスクが顔に貼り付いて息が吸いづらい、そのため息が続かない、声が飛ばない、口を開けるとマスクがずれるので歌唱に集中できないなど、歌唱するにはかなり厳しいものとなった。芯の入ったマスクやシリコンインナーマスクなどでマスクと口や鼻の間に空間を作り、呼吸時の負担を軽減するものを薦めたりと、技術面以外からも少しでも自然な状態で歌える方法を模索した。また双方口元が見えないので、口の開け方や舌の位置について、先に問題点と改善法を口頭で伝えた後に教員のみがマスクを外し、声を出さずに口の形や舌の位置を示して指導する必要があった。マスクとパーテーションにより不自由さはあったが、その場で良い点、問題点を指摘でき、また教員が伴奏を弾くことで音楽の流れを作り出し、それに合わせて歌唱することで、和声を感じながら効率よく息を流すことを促すことができた。

一方、課題提出の週では課題曲が変わるごとにその曲のできた背景や、作曲家、作詞家について、歌詞や単語の意味などのレポートの提出とともに、練習においての自己分析（どのようなことを心掛けて練習したか。それにより改善した点、改善できなかった点や気付きがあったことなど）をメールで報告することとした。これに対して、教員は前期と同様にその日のうちにメールでフィードバックした。コロナ禍以前から口頭で、楽曲の背景や歌詞の意味は調べるように伝えていたが、今回レポート課題を提出してもらうことにより、より楽曲に向き合う時間が増え知識と理解が増したことは、表現力の

向上に繋がっていたように思う。また、練習における自己分析は自身で言葉にすることにより、なんとなく意識して練習していたことを明確に意識して練習に取り組むことが出来たように見受けられた。これは学生からの質問内容や、対面レッスン時よりも質問が増えたことから明らかであった。加えて教員の指導をどのように理解しているかも窺い知ることができた。

コロナ禍2年目となった2021年度からは、通常通り毎週対面で教員、学生共にマスクを着用しレッスン用パーテーションを用いての個人レッスンを行っている。学生の入替わり時に消毒と換気を行うことも変わらないが、今年2022年度からは各教室に空気清浄機 AirDog も導入され、より安心できる環境でレッスンを行っている。これにより以前よりも換気時間が短くなり、時間のロスも解消されている。

3. ヴォイストレーニングの項でも述べたが、声楽は体が楽器であるため、実際に自身の演奏を聞くことは難しい。その為第三者である教員が学生から発せられた声や音楽を聞いて、良し悪しを判断して伝え、学生はその時の体の状態を覚えて上達していくのである。その場で体感することが何よりも上達への近道であるため、対面レッスンに勝るものはないと筆者は考えている。学期末に行う学生へのアンケートでも、学生のほぼ全員が「声楽」の授業は対面が望ましいと回答している。マスク着用での歌唱における課題は残るが、コロナ禍によって試行錯誤した経験は、様々な気付きと昨今急速に普及しているインターネット環境での可能性を示唆することができた。教員にとっては今までの伝え方がイメージワードで、いかに曖昧な表現で伝えていたかを認識することとなり、伝え方を考える良い機会となった。この点においては「声楽1」では学生を二つのグループに分けて、楽曲のレッスンとヴォイストレーニングの授業を毎週入れ替えて行うことにより、発声の仕組みや歌うことに必要な体の構造の基礎知識をしっかりと学ぶことに繋がった。この試みは楽曲のレッスンでの発声指導の言葉の選択肢が増え、学生の理解度も高まり、良い改革だったと思わ

れる。

最後に、一般社会でもマスク着用の是非が問われているが、音楽業界ではオーケストラのコンサートで団員がマスクを外して演奏することが増えてきた。しかし今夏のNHK全国学校音楽コンクールの合唱コンクールでは未だマスクを着用して歌っていた。このように、合唱での活動や歌唱における飛沫感染の危険性は未だ解かれることはない。空気伝導がマスクによって阻害される中、学生が間違った感覚を覚えないう、指導者は細心の注意をもって聞き分ける必要がある。

5. 今後の課題とまとめ

5-1 今後の課題

各教員が様々な工夫を凝らして、このコロナ禍における声楽レッスンに取り組み、その中でオンラインならではの苦勞と利点を感じてきたことを述べてきた。

その中で、特に問題点として挙げられることは、学生側のネット環境がどうであるかということである。例えば学生側のネット環境が良好である場合は、YamahaのSYNCROOMを利用して、同じクラスの他学生のレッスンをリアルに聴講出来るようになる。YamahaのSYNCROOMは音声のタイムラグが無く教員のピアノ伴奏でリアルに学生が歌う事が出来る為、これまで問題点として述べてきた、「タイムラグ」の解消がなされ、発声練習から始めコロナ禍以前のレッスンと同じように進める事も可能である。ただしこのシステムを使用するにはいくつかの条件が整わねばならない。その条件とは、①互いが光回線である事、②特定のプロバイダーであること（プロバイダーによっては通信不可な場合もあり、かなり通信環境に左右される）、また③音声のみの通信で映像は無いため、ある程度声楽の勉強が進んできた場合に使用可能であること、である。

YouTube限定公開などを利用した動画の録画によるやり取りは、学生側も声楽を学び始めて間もないため、どのように歌唱したものを教員へ送っても良い動画なのかを試行錯誤し多く

の時間を費やす結果となり、教員側も送られてきた動画を視聴し、レッスン計画を立てその後でレッスン動画を収録せねばならかなりの時間を消費し非効率であった。

これらの事を踏まえ、今後の課題はコロナ禍以前の、マスク無し対面レッスンで得られた授業での成果を、現在の制約の元で如何に実現して行くかである。

現在本学での声楽レッスンはレッスン用パーティションを用い、物理的に飛沫を飛ばす、また受ける事を遮断し、尚且つ教員そして学生ともマスク着用状態にてレッスンが行われている。これにより学生は教員の歌唱をリアルに聞くことが出来る。また教員は学生の声を聞いてその場で問題点を指摘でき、教員のピアノ伴奏によって音楽的な曲の運びを示す事が出来ている。唯一の問題はお互いのマスク着用により、口元が見えない事と、レッスン用パーティションによる声の反射である。声の反射は自身の声を良く聞く事が出来るという利点もあるが、声楽レッスンにおいて口元が見えないのは大きな問題点である。

筆者は苦肉の策として、歌うと飛沫が飛ぶため、マスクを一時的に外して歌わずに口元を見せて開き具合や口角の位置などを教え、学生にも歌わずマスクを外して口の形をチェックし、またマスクをして先程指摘された形のまま歌唱するように指導している。

また長期間にわたってのマスク着用の義務化によって生じている問題は口の形だけにとどまらない、マスクの着用によって表情が乏しくなっていると感じる事も少なくない。歌唱において顔の表情は重要な要素の一つと言えるであろう。表情筋を良く動かす為の方法も指導する必要性を感じている。

5-2 まとめ

2020年に始まった新型コロナウイルス蔓延によるコロナ禍は、ありとあらゆる分野に多大な影響をもたらした。教育現場も例外ではなく、われわれのような実技教科のひとつである音楽科にとっても由々しき事態となったのは確

かだ。

コロナ禍において感染リスクとなる最大の要因のひとつに「飛沫」があげられた。しかし「声楽」というジャンルにおいて、歌うことによって発生する「飛沫」は、言わずもがなさげられないのである。

今回の事態は、世界中の声楽指導者が、これまでになく窮地に立たされたであろう。本学も例外ではない。音楽における実技の学びは、教師と生徒が同じ空間を共有し、演奏を聴きあい、教師の実演や指導を肌で感じることで成立するというのが、筆者らは当たり前だと思ってレッスンを受け、教授行為を行ってきた。

ところが、コロナ禍においてはそうはいなくなかった。世論が「外出や人に会うことを極力避けなければならない」という流れに傾き、対面での授業を実施することが不可能になった。

本稿では、われわれ声楽担当教員が声楽の指導において試行錯誤を重ねたうえ、実施してきたさまざまな形態の授業について述べてきた。このような厳しい状況下にあってもなお、声楽の授業が実施できた背景として、今や当たり前となりつつあるインターネット環境の普及、YouTubeなどの動画配信サービス、Zoomに代表されるWEB会議システムの存在、LINEやMessengerなどのような、動画や音声を手軽に送信することができ、また映像をともなう通話が可能な連絡ツールの存在が大きい。俗にいう「インターネット社会」の発展が、コロナ禍における授業の実施において大いに役に立ったといえるであろう。

また、コロナ禍での声楽の授業をとおして、さまざまな新たな発見や気づきが、教員、学生の双方にあったのではないだろうか。

学生が自分の演奏した動画を収録する場合、課題である曲をきちんと譜読みをし、仕上げなければ歌うことはできないし（もちろん通常のレッスンでも、きちんと準備してレッスンに臨むのは当たり前のことであるが）、わずか2～3分の曲であっても、伴奏に合わせながら、もしくは無伴奏で1曲をとおして演奏し収録するためには、それなりの集中力が必要であること

に気づいたかもしれない。伴奏の音源を自分で作成した学生は、「こう歌いたい」「こう弾きたい」が合致した演奏がいかに心地よやかに気づいた学生もいるだろう。また、既存の伴奏（いわゆるカラオケ）で歌うにはテンポや間（ま）をピアノに合わせることに神経を集中する必要があるが、その経験があつてこそ、実際に伴奏者が弾くピアノ演奏で歌うこと、二人で音楽を作ることの有意義さにも気付くこともあるだろう。

教員である筆者自身にも発見、気づきが多くあつた。コロナ禍真只中であつた2020年度、2021年度は主に実技レッスンを担当していたが、学生の動画を視聴し動画や時にはメールでフィードバックを作成する際、指摘したい点を明確にしつつ適切な言葉にして伝える必要があり、フィードバックの動画収録前にある程度こちらの指導をまとめる必要があつた。また、動画収録の際や双方オンライン型で指導する際は、デバイスの音質などを考慮し、少しゆっくり且つはっきり目に話す必要があり、そのように気を付けながら話しているうちに自分のなかで言いたいことがまとまっていくという経験も幾度もあつた。それと同時に、コロナ禍前の対面でのレッスンで、うまく言葉がまとまらずどこか曖昧で漠然とした表現をしたり、ジェスチャーを使って指導を行ったりしていたかに気づかされた。コロナ禍における実技レッスンは、自分の教え方と改めて向き合う良い機会になったし、発声のメカニズムを再認識し学生に正確に且つわかりやすく伝える努力をする必要があつたことに気付かされたのである。

コロナ対応について少しずつわかってきた2021年度は、原則として対面でのレッスンが行われたが、感染者数がさほど多くない地域出身の学生など通学に不安を感じる学生も数名いた。そのような学生には登校を無理にすすめず、2020年度の経験を踏まえたレッスン方法にすぐに切り替えることができた。不安を抱える学生にも臨機応変に対応できたのも、2020年度の試行錯誤が生んだ大きな収穫ではないだろうか。

もちろんいかなる授業方法も、学生の満足度や教員の負担などの課題は残る。対面、パーティーやマスクなしで行うレッスンこそ最善であると筆者は考えているが、コロナ禍はわれわれに、新たな授業形態の可能性を見出す良いきっかけを与えてくれたことは間違いない。この経験を踏まえ、さらに質の高い充実した授業のあり方を検討したい。

執筆について

1. ガハプカ、2. 大橋・黒田、3. 大橋、4. 黒田、5. 篠部（今後の課題）・八木（まとめ）をそれぞれ執筆した。

-
- ⁱ 文部科学省「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校において合唱等を行う場面での新型コロナウイルス感染症対策の徹底について（通知）」令和2年12月10日付
 - ⁱⁱ 一般社団法人全日本合唱連盟「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」第3版2021年6月7日策定
 - ⁱⁱⁱ ガハプカ奈美『音楽教育における感覚的認識の一考察 京都女子大学発達教育学部紀要第10号2014 pp.49 - 55